

鶴見国際交流ラウンジ訪問記

—多文化共生のまちづくり

横浜市鶴見区は、市内で二番目に外国人人口が多い区であり、現在では区民の約二〇人に一人が外国人である。多様な人々が共存するこの地域では、多文化共生社会を推進させる取り組みが数多く行われている。二〇二四年七月三日、私たちは鶴見駅から徒歩約二分のシークレイン二階にある「鶴見国際交流ラウンジ」を訪れ、五代目館長の小林広子さんと学習支援コーディネーターの工藤文子さんへ取材を行った。この記事を通して、多文化共生の重要性についてさらに意識を高めていただけると幸いである。

鶴見国際交流ラウンジについて

二〇一〇年に横浜市国際交流協会（YOKE）によって設立。ラウンジ運営事業と多文化共生の地域づくり事業の二つに分かれる。学習支援事業（外国につながる子どもたち向けの学習支援教室運営等）にも力を入れている。鶴見区の「多文化共生のまちづくり宣言」のもと、多文化共生の地域づくりを行っている。現在、一六人のスタッフによって構成されており、外国人スタッフの中には日本での子育ての経験を持つ者もいるため、利用者にはリアルな情報提供やサポートを得ることができる。



鶴見国際交流ラウンジ入口

学習支援施設としてのラウンジ

● 日本語教室

六つのボランティア団体によって開催されており、教室によって内容も様々である。初級から中級までレベル別の教室や、水曜日の夜に行われる日系中南米人のための教室、ほかにも希望によってはマンツーマン指導も受けることができ、それぞれの目的や都合によって選択することが可能になっている。

● 日本語ボランティア向けの講座

多文化共生に長けた講師などを招いて、日本語ボランティアの育成講座や外国につながる子どもへの学習支援のスキルを学べる講座を開講している。

● 外国人親子カンガルースタイル

赤ちゃんを連れて参加可能な日本語教室や生活ガイドダンスを提供。地域の子育てサロンなどへアウトリーチをし、外国につながる親子と日本人親子の交流の場を作るサポートを行っている。また区内の公共施設、学校、エスニック料理店などの情報と利用方法をやさしい日本語や多言語で知ることのできる「子育てつながりマップ」も提供している。

● 学習支援教室

外国につながる子どもたちの学校の勉強をサポートする場であり、小学生は月二回の「あおぞら教室」、中学生は週一回の「なないろ教室」に参加することができる。夏休み宿題教室や中学三年生入試対策クラスも設置している。

外国語学部 スペイン語学科4年

新垣玲奈、齋藤りん、丸屋凜奈

国際理解の場としてのラウンジ

年に一度の「多文化共生フェスタ」の開催や、地域イベントへの参加等をする中で、外国人と日本人がお互いの文化を知り、多文化理解、そして多文化共生を発展させる役割を果たしている。二〇二四年一月一六日（土）にはネパールをテーマとした多文化共生フェスタを開催予定だそう。

◎ なぜ鶴見でラウンジを始めたのか

▲ 鶴見は元々南米の人が多くということもあり、多文化共生に関して、ほかの区と比べても昔から先んじて盛んに取り組んできたという歴史があります。

二〇一〇年にラウンジが開館されるまでは、鶴見区役所内で日本語教室を開講していました。その後、鶴見駅東口の再開発事業として大型複合施設シークレインが建つときに、鶴見区国際交流事業推進委員会が有識者、区民の方々の意見をとり入れながら作り上げました。横浜市国際交流協会（YOKE）が鶴見区の委託を受けて設立されたラウンジは、鶴見の他にも中区と南区にもあり、鶴見は三つめになります。



壁：子育てサロンなどのポスター、写真下の棚：ドリルやカルタなどの学習セット

Q どのような子どもたちがラウンジを利用するのか

A ラウンジの設立当初、近隣の鶴見小学校や鶴見中学校からは中国につながるのある子どもたち、潮田地区からは南米の子どもたちが多く通っていました。しかし、近年は中国ルート、南米ルートの他、区内のもっと遠くの学校からもネパールやベトナム、インドなど色々な国の子どもたちが勉強しに来ており、多様性が進んでいると思います。また、新規に来日する子どもがどんどん増えていきます。ラウンジ内の相談窓口の前に置かれている机では自習学習が可能です。そこでは外国につながるのがある子どもたちが教材を持参、もしくはラウンジに置かれている教材を使って自習するためにラウンジを利用する子どもがいます。この自習スペースで熱心に勉強を続け、大学受験に合格した子どももいます。



ラウンジ内にある教室のひとつ

Q ラウンジで働くやりがい

A 工藤さん…子どもと関わる事ができる仕事はやりがいがあり、素敵なことです。子どもたちは、勉強していてつまらないと本当につまらない顔をし、分かっていた時には顔を輝かせます。子どもたちの表情が正直に分かるところが楽しいです。また、学校で日本語が分からず我慢している場面が多くあると思うので、教室では少しでも楽しいと思える時間があったらいいなと思います。

A 小林さん…三年前に鶴見国際交流ラウンジを運営し

ている横浜市国際交流協会（YOKKE）に入職したタ イミングで館長になりましたが、多文化共生は横浜市 だけではなく全国的に必要とされている取り組みな ので、そこに実際に携われることはとてもうれしいこと だと思っています。以前、短期間だけインドネシアに いたこともあったため、マイノリティーとして経験し たことを鶴見国際交流ラウンジで生かせればよいと 思っていました。外国の方が来た時にはその気持ちを 持ちながら接するようにしています。このような経験 を生かせる部分にやりがいを感じています。

Q ほかの団体や学校との関わりについて

A 神奈川大学とは、二〇一二年から「国際協力研修講 座」という講義を通じて関わるようになりました。神 奈川大学のスペイン語学科が一番交流の歴史が長いで す。多文化共生の実施の場として選んでくださってい ると思うのですが、毎年学生さんを教室に送ってくだ さりとても助かっています。他にも連携している団体 は多くあります。区内の小中学校や高校、大学、社会 福祉協議会との連携が多いです。地域ケアプラザ というのもいくつかあり、そこには子育てサロ ンがあるので、外国の親 子向けのイベントを一緒 に考える際によく連携し ています。



スペイン語の絵本と英語の絵本

Q 鶴見国際交流ラウンジへの問い合わせについて

A ラウンジでは、幅広い相談を受けています。その中 でも特に、日本語を習いたい方が一番多いです。例え

ば、先に日本に来て

いたお父さんからの 「後から来た奥さん と子どもに日本語を 習わせたい」という 相談です。子どもを どの学校に通わせる か、という相談や保 育園についての相談 もかなりあります。その際には、相談した方に保育園 の入園条件を伝え、書類の手伝いをしています。また、 行政から届く様々なお知らせをラウンジのスタッフが 読み、その内容を伝えたりもします。



学校・仕事・子育てなど 情報ごとに分けられた資料棚

Q 支援する上で問題だと感じる点について

A 土曜の小学生クラスは、子どもたちには（特に低学 年の子達は）保護者に連れられてやって来ます。しか し、支援が必要な子の中には、親御さんの仕事や、家 からのアクセスの問題などのため、教室に来られない 子どもも多くいるだろうと思います。そのため鶴見国際交 流ラウンジで勉強をしている子どもたちは、とても恵 まれていると思います。また、外国につながる子ども と言えば、日本の学校での学習に苦労しているイメー ジがあったのですが、最近では、経済的に恵まれており、 母国でも成績が良かった子がバリバリ勉強し、塾にも 通い、その上で無料なので当教室にもやってくる中国 の子どもたちも見られるようになり、大きな学力の差 を感じます。本来ここは学校の勉強に困っている子の ための学習支援教室なので、最近では、塾の勉強は見 ることができずと断る場合も増えてきました。

【Q】外国のつながりがある子どもたちに高校受験はどのように行われているのか

【A】外国につながる子どもたちにとって大きなハードルは高校受験です。たとえ中学生になって来日して日本語が全然分らない生徒であっても、日本語による入学試験を突破しなければ高校生にはなりません。受験の仕組みを知ることや、高校を選ぶことも、外国の家庭にとつては大変なことです。日本では、高校卒業の資格がないと働き口を見つけることがより難しくなるため、とにかく頑張って高校を卒業してほしいと思っています。神奈川県は来日直後の児童の状況を考慮し、在県外国人特別募集（外国人の人だけを募集する枠 全日制・一六、定時制・四）を行っています。この募集により、来日してから受験を受ける年の二月一日時点で通算六年以内の児童は、日本人の生徒と競争することなく入試を受けることができます。神奈川県は全国でも外国人枠が多い、恵まれた県です。また、在県枠を持つ高校は、入学してからも様々な支援が用意されている場合が多いです。

【Q】ラウンジの今後の方針／課題はどのようなものがあるか

【A】子育て世代だけでなく、高齢者支援にも焦点を当てた多文化多世代の機能強化事業を進める方針です。課題としては、横浜市に在住する外国の方に向けた情報発信が挙げられます。鶴見ラウンジが主催するイベント等に外国の方が

なかなか集まり



七夕の短冊

にくいです。どのツールを使用し、どのタイミングで発信すればより多くの外国の方に届けられるか、工夫する必要があります。そこで、七月一日からラウンジのニュースを閲覧しやすいように3言語で作成し、リンクを公式LINEで一斉に送信しました。これからは、日本語以外の言語で情報を発信するように検討していきたいです。

ラウンジへのインタビューを終えて

今回インタビューをさせていただいた工藤さんとは、鶴見区内の潮田小学校で行われている「つるみーによ」という、外国につながる子どもたちの宿題をサポートする教室にボランティアとして以前からお世話になっていた潮田小学校は私の母校であり、通っていた当時から外国につながる生徒が多く在籍していました。現在ほどではなく、かつ日系中南米の子がほとんどでした。そのため今回のインタビューで「最近では中国やベトナム、ネパールなどのアジア圏からの生徒が増えている」と聞き、さらに国際化したなど驚いたと同時に、確かにつるみーよに参加している児童にもさまざまな国の子がいるな、と感じました。このような多文化共生の社会が成り立っているのは、ラウンジの皆さんのサポートがあってこそだと思います。そのため、ボランティアや今回のインタビューを通じて、少しでもその協力ができたことを嬉しく思います。

（新垣玲奈）

私もつるみーよのボランティアに参加させていただいております。私がこのボランティア活動に参加するようになったのは、今回インタビューで一緒になっ

た新垣さんから誘っていただいたからです。少しでもお役に立ちたいと思い参加を決めました。小林さんと工藤さんがインタビューのなかで、多くの人にラウンジの情報を届ける必要があるとおっしゃっており、まさにその通りだなと感じました。私はつるみーよについて新垣さんからお話を伺わなければ、知る機会はなかったと思っています。そこで、今回のインタビューをきっかけに多くの人に鶴見国際交流ラウンジを知ってもらい、そしてラウンジが発信している情報の拡散につながればと思います。

（齋藤りん）

今回、インタビューをさせていただいた工藤さんと小林さんとは、昨年前期の「国際協力研修講座」という講義での鶴見国際交流ラウンジ研修でお世話になりました。夏季休業時に行われた研修で、海外国籍にルーツを持つさまざまな境遇の子どもたちに学習指導を行いました。私は、ボリビアの中学生の男子と中国の女子に数学を教えたり、ネパール人の中学生の女子の日本語ドリルを添削したりしました。彼らと交流したことで、勉強を教えることの楽しさ、やりがいも感じながら、またいろいろな国にルーツを持つ子どもたちに接することでそれぞれの国の文化を持つ個性も知り、とても貴重な経験となりました。また、今回のインタビューを通じて、子どもと関わることでできる仕事はやりがいがあると感じました。

（丸屋凜奈）



インタビュー後の集合写真

（写真中央・工藤文子さん、右・小林広子さん）